



當世
秀吟

冠附の
提

全

へ
3869
89

44





當世
秀吟

冠附の巻

全

9
3869
89


~~~~~と埃したる  
極と号する~~~~  
~~~~~

~~~~~甲辰  
~~~~~日

の
~~~~~

あふむ石二篇

當世

冠附

浪華四徳菴梅州選

祝い給ふ

社<sup>か</sup>下<sup>り</sup>が<sup>ら</sup>汲<sup>み</sup>む水<sup>み</sup>と<sup>り</sup>星

せんぶり<sup>のん</sup>春<sup>さ</sup>と日<sup>ひ</sup>ふ<sup>る</sup>若<sup>わか</sup>草<sup>くさ</sup>

夏<sup>なつ</sup>の<sup>ひ</sup>四十<sup>に</sup>と<sup>は</sup>の<sup>か</sup>雷<sup>かみなり</sup>

~~~~~

~~~~~

物の爲とすつこと  
そくしつとすつこと

そくしつとすつこと

春うらやましいを  
とん中とつと垣子  
面むい眼と物と

とん中とつと垣子

さうげやうて  
さうげやうて  
さうげやうて

さうげやうて

水色一知い消は女房  
うつとりの夢とらじし  
二季どけ銀と物と  
井戸むらさきの女房  
浪文の毛文物  
物と物と物と  
アム  
駕の中うらやましい  
いつも女房の蕾が  
昔乃末地が

素靴のあらし女房  
毫のきりし海止んせ  
女をとりてくるも兼子  
卯トの針を坊女房  
瘦るの若く尾はとせぬ  
書乃中へて知人梅  
ふつり笑ひ  
耳よりかきしつみま  
糸の落る豆くらと  
二折折る紙巻一

心小思ふ星きり  
うましく呉る伯母は  
向ふえたる眼をみ  
先めてらん  
お初る着物よきり  
お絶と孫はさ合ハ  
あらしの顔二人出ま  
凍の白く若をかざり  
茶乃白く酒祝ひ  
画は如し

ねもこもりもあふゆり  
降りつえつあされつ  
中か指へ幅よ垂い  
振先へ垂く山唄り  
帆を連くも湊入り  
礎と石の産と踏

今こうふナア

針さー行船へ垂い  
足流へてどや肉のどき  
車座の孫ゆづり食い

手の教さぬぬ月とるせ  
隣へ繕くる女房  
はりのりして

一日妻と知る女房  
さくらを投働りし  
やけど宿習らす女房  
戸張の色紙残念し  
聖乃日和と侍の女房  
結接し  
おかげん庭のふこじ

中より知らぬに  
舞ふがうつく花うなり  
社神の振る神通一  
一口吸つて蓋とて  
鼻へ吸てうろく銅洗  
至外体の香で聴  
休の小刺が一  
櫃の老りくちと  
我家とりよあふ  
あつたりと

本花芽の匂人蓋と  
浮る日も鏡と  
小舞ハくらめめ  
他人をせいのちが  
蒲葉へ葉外と  
向小舞も細く  
とくく飯名で  
おふち  
とくく飯名で



日暮の竿へ出る女房  
うしろの轆と登一のけ  
あまの指輪をぬいて

志つとかしめ

町て飛入備へあり

沖ふすまじらみ波は

うさ海さの船思き

中々あひ

悔と道日とをやし

才分引く息と吹キ

百程惚うと思キや

情な

道不へ思ひ顔とせ

南座の恥と笑て去ふ

切り

牛のよぶれと踏らぬ

後りやうらめしむ

積もる埃くやうじ

朝く軍をえらうぬ

去はつ汗ふ積が糸

かよつて居てこそ春ある  
人より低ハカとまひ  
と會つて後なる

くさく骨うら出る光り  
積と山と春ある

堅く

書あし入もあし出  
合羽と春の夜と

おん

春の暮く森くうら

春の暮く人よ笑う

舞袖小鍵の入る女房

真羽の日よも焼てる

コト

井戸うら糸程より

うらんふとづふま女房

舞人の上の毛とまひ

枕とさけと眼と笑し

うつと息が海くさん

そらうくと

うら

新しうおのりて出る女房  
末づくは枝引て出る  
二尺あすの襦袢のせ

とさうやうみ

たつ一人ふかあり

冷まへあふふあ日があり

とさうやうの言斗

原代より首にうけ

及小揖とらる手の灘

とさうも山音号

柳灯一ツ淋しあり

流る溝へ出る女房

のんとうや

花をそ樹のわらわ

箱はと家へ来てこゝ

なつふし

賣り代は物と物し

水溜を番へ喚て去ふ

折みや虫立つるも

あらう鳴り登をぬけ

十分く

小橋より見ると森の

そらしく手塩田舎

柳も真浦も温湯で掛

籠り入る稲乃浪

指の先ささくも

めつさうか

小杉包とついでこの

血かきんいひよりの女房

礼儀から

小まじり書と名とくさり

箸もぬ指先を居

月小三日の足もこい

志んく

くろくハ秋も曇も落

ち中ふ花合ら初

月ハ森入るあふさ

知ら一尺程積モ

月より川音ささく声

まづうん

みつゝりて眼よ切えし  
撥出しと目よ赤が咲キ  
家の定まる顔もさき  
なれど

磯原の辞宜はてめいひ  
谷の下うへをさふ  
うのりくと

露月花の穂へまき  
手ちる豆がさふ知り  
コ、せほし

鏝うく備返入女房  
めりさち中て孫へちり  
顔もさき女房の子  
さうも後程が産り  
ちよつと敷入し女房  
我より先キへ孫をほし

天宮も一人もふゆし  
賢く考れおさうかひ  
風よほせ

そめく〜が 雨名い  
一ト云 破の 名い 女房

けつら 春日

憐れ けり 袖も くらみ

あを 春上

新し ぬ 顔も けり

白く 濁つゝ 湯と 流し

ちと せり

ちよと 心 清く えて めい

幸い あり けり 鼻 頤

よつ ぞし

ゆ 又 冬 人 手 拭で ぬし

あ 又 解て せり 又と 續

せり 春上

盆乃 扱一ツ 減し

小 春 春 春 春

け 改 春 春 飯 取 春

俄 小 晴 春 春 春 春

春 春 春 春

新 春 春 春 春 春

是より庭と掃くまじり  
ふははあひ

今ハきくくたぶ杖  
鳴ふ車へ入る笑ひ  
どの小枝ふるまをる  
梢うらむ鳩のふれ

ゆれくし

作て痛切なる上り  
さつと流しと流るはし  
赤い花の傍と退る

持葉昨と荷をくし  
花彩の舟は孫拂  
是より知る一口路  
御練の細のびくまじり

うつろ憎

忘るる柳小皿斗  
転るや人こゝ眼をい

何でも坊のれ  
宵曉は星を負ひ  
くくまぬ所ぬいぬき

今この釘くわ仇あだふせぬ  
斧きまき針はりとぬらとかり  
きのららひの麻あしからけ  
歌うたのちううみまらら始はじ末まつ

勿な体たかい

ららまましの冥みやう加かまり  
命いのちの細くいれとまて  
清きよ代しろ裁いきる花はな  
雪ゆき加かまりとい下くだやまい  
信しんたたのまく石

ははくくえりやま葉はらら始はじ末まつする  
粉こながあらいひの粉こなららふの  
濡ぬらら脊せ中ちゆうとまつと向むかへ

サア是こから

力ちから強つよいまらら林はやし葉はを

色いろくく子こ

脊せ中ちゆうのま理りとりてあまい  
骸かゝいららりらあらるる女め房ぼう

本ほんふそれく

吐はくくらら皆みなあらららしん



子休の方がいぬ角

ヲ、辛

丸ふ成と角尋子

りふ一針と楷しう立

首上チて消を灯がきい

そむく系書てたき

灰のゆるとえ失い

庭ふつぼく何じやい

まうーマア

一本重坊へ持こー

今入の搦はちりー押

素

人ふれむ々朝の喜

皴の手赤い神遊

あふを二紫よ後总せ

葉の巻とる笑の一そ

海山里と移い和

かーるん

終ぐけで出るたやうあ

えん歩ゆけぬ連なる

絶つてあり

市街瑞の玉鈴の音

浮く影を立けつり

葉と思ふ程に春を

破るぬ垣ふを周を

先安塔

意未便りよ家残りし

去更へ舞く春乃垣

引近した紙段ふまを

持ぶるものへ花と持せ

収めし跡り庭へ積り

物さうん

つとを縄屑たつふを

経雨うりも一日と思ひ

振り出を紙よもひごま

ようあま

宵の夕暮を五度り

夢で書くと清書巻

巻のまいたるあがめ

中ぶる巻理る底とあり

遊あそび見みく

梅うめつとあはれ本の館たねい  
杖つゑはとらるる杖つゑあめり  
世よは終つひぐ礎いしづなが堅かたい  
あまの指さしが産うまのゆり  
まゝいゝの上うへをくら

氣きハハそりそり子こ

袴はかまふふーのあ女に房ぼう  
折のとあつべて同どうドド衣え  
あは限かぎもあつる程ほど

あゝるるあふふ手てあ書かき  
うらげちんまうけけ女に房ぼう  
あはれあゝくまめ目め

礼れい弁べんをたじ

輪りんは日ひ乃の指さしと唇くちびる工こ  
裸はだかでをんちりあは

いゝさよう

店みせ々々燈とう的てきの灯あかりぞ明あい  
市場いちばく又また声こゑをま

用もち心こゝろ嚴げんく

湯の湯も茶とせし  
玉のあはれは城より

こつちりと

海とくつさぬ袖を

互古の終りけとまじ

争ふ者なき事の名を

朝の君乃もぐ店ふり

うやむ

脊中で湯気のま合相

あまくち

登飯くうりて振り

末廣物さなり抱き

新しん神子と通し

忠業の海へあひ女房

人々と新衣へまのこ

錢う二三把もぬじ

黒のあを汲む女房

守りゆらぬ

若屋の辰持まがつひ

水の冷くもるえ

那津の風名場を河ヶぬ

うづらあぶぬ

四十刻の日と遊之

先巻をくビラと強り

我る珠よ若くしり

礼よて

行神ぬぬと柄と敷

取て強く手抱てまひ

辻は新侍の屋敷

いそ〜と

登坂くうて振り

末廣物となり抱て

新しん神子と通し

忠業の滝へ参り女房

人衆と新店へまゝ

後さ〜二三把ものじ

黒の糸を汲む女房

十拿ぐゆるみ

若屋の辰持るがつゝ

糸の冷るるる

那深の風名場と河をぬ

うつらあはぬ

四十刻の日と遊り

先巻をくヒラと張り

我は流しおとるうり

礼のよそ

行神ぬれと柄と敷

取て喉も抱てあり

辻は新はさむ屋の

いそ〜と

輝い一思〜女房

らうその灯で足付

い特〜と

象負へ猿なり恵

あゝ起る眼が念ぬ

字の墨画があはらう

女はやうにあはらぬ

是で〜と

馳をハ平〜又居ハ

動切〜人咽と紙

いづれも  
埃も流して来た紙巻

いつも

いづれも通つて声があり

いづれもととけい合ひ

いづれも又陽りり

いづれも

いづれも綱で巻理ふ

いづれもあうらうあ

いづれも

いづれも汗はあをい

いづれも汗はあをい

いづれも

いづれも眼と鼻あをい

いづれも橋はけ

いづれも一本

いづれも後ろの眼

いづれも緋

いづれも一丁

いづれも一丈

懐かしして  
 夕日と志士はあはれ  
 積もる山は蒼くあめ  
 人より云ふやうに喰ひ  
 魚草よりおぼろしく  
 さくらも色で  
 めくよ喉うそきぬ女房  
 昔乃銀ちりも出  
 登りやかし  
 のどかしのんどりと墨り

おどろけ遠くはるかに  
 おもひあり  
 了の脊中へ秋きり  
 半月朝へ仲焚きさ  
 半季乃孫をさうて並  
 おろかたも  
 めくみそとぬる古垣  
 粥きらのもれたぬ櫓  
 紙捲く刷毛を揃え生  
 香づきい



帯して衣に 我が汗  
 思いの介乃 依 扱  
 軟の言まゝ 杖ががめ  
 吹く風くくがぬらひ  
 此頃迄 此の言まゝ  
 一日もつらべ 体免  
 弊の上で 足のだし  
 たるあしや  
 魚くも入 指をらん  
 後とらふで ぬみ出る

ぬくもつて  
 解くも 扱 去はり 上げ  
 大木 枝 蔭と 汗よきふ  
 仕とく  
 首筋 手 扱て くらひ  
 安らう 綱鼻 喰ひ  
 是ふや  
 跡の 底ぬけ 痛ふ 並ひ  
 所 扱 所 扱 ふ 並ひ  
 着ぬる 骨と 紐 通し

云又出〜の舟を載し  
る川つらき浪中  
猪子へ猪子よ〜居り

成程〜

生々ぬらぬ弱盤一投  
後をそたく入てぬけ

今も今とそ

以候り法をむ〜  
葉のぬけ〜

おのれ中〜

〜風の下潜り

埃の中小根と〜

一玄耳乃底ふる〜

〜日和

来と候ひふ〜

灰汁桶へあ汲む女房  
野風呂の〜

弱〜中〜

た〜小〜  
楽〜

遊あそひよあそびよあそび尋たづね合あひ  
小こささんん斬き又またのの終はるる

うう奇き懸けん

天あま宮みや一い卷まきののひひらら女に房ぶどう  
大おほ坂さかがが一いトと眼めふふちちつつと  
一い枚まいののああらら二に階かゝのの戸と  
笑わらととななららんんのの跡あとをを辨わちち  
そそつつとと首くび筋すぢ上うへへへ撫なでで  
神かみへへああててててとと神かみへへああららうう  
今いま入いりり後ごへへ押おささエエ

一い夜よぬぬとと起おききてて笑わらふふ

古ふる切きりり

仕し込このの布ぬい巾きん一い人ひと持もち  
毎まい日ひぬぬららぬぬ居ゐりり交まつつ  
後あとにに業わざくくまま鞋かししめめ

出い来きととぞぞ

淡あいいとと小こ持もちふふ糸いとルる甘あま露つゆ  
畦あぜ越こへへとと稻いね乃の浪なみ  
火ひふふくくけけるる朝あさ霧きり入いるる  
いいつつそそととんん

負<sup>まけ</sup>ふんご<sup>い</sup>路<sup>ま</sup>集<sup>つ</sup>る

娘<sup>むすめ</sup>一<sup>い</sup>い

一<sup>い</sup>下<sup>げ</sup>半<sup>はん</sup>り<sup>り</sup>宙<sup>ちゆう</sup>て<sup>て</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>キ

伏<sup>うつ</sup>向<sup>むか</sup>い<sup>い</sup>福<sup>ふく</sup>佩<sup>はい</sup>く<sup>く</sup>前<sup>まへ</sup>

女<sup>むすめ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>結<sup>むす</sup>知<sup>ち</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>

産<sup>う</sup>め<sup>め</sup>け<sup>け</sup>半<sup>はん</sup>福<sup>ふく</sup>ふ<sup>ふ</sup>華<sup>は</sup>い

如<sup>ごと</sup>女<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>

来<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>去<sup>い</sup>め<sup>め</sup>を<sup>を</sup>産<sup>う</sup>と<sup>と</sup>集<sup>ま</sup>る

拂<sup>はら</sup>の<sup>の</sup>銀<sup>ぎん</sup>子<sup>こ</sup>小<sup>こ</sup>名<sup>な</sup>と<sup>と</sup>法<sup>はふ</sup>蓮<sup>れん</sup>

虫<sup>むし</sup>お<sup>お</sup>ハ<sup>ハ</sup>穢<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>脊<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>

愛<sup>あい</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>

小<sup>こ</sup>波<sup>なみ</sup>の<sup>の</sup>孫<sup>ひ孫</sup>が<sup>が</sup>向<sup>むか</sup>い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>出<sup>で</sup>ぬ

と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>

戸<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>知<sup>ち</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>女<sup>むすめ</sup>房<sup>ぼう</sup>

ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>

子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>産<sup>う</sup>と<sup>と</sup>集<sup>ま</sup>る

眺<sup>なが</sup>み<sup>み</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>中<sup>ちゆう</sup>波<sup>なみ</sup>が<sup>が</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>

清<sup>きよ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>

神<sup>かみ</sup>一<sup>い</sup>も<sup>も</sup>新<sup>にい</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ

お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>産<sup>う</sup>と<sup>と</sup>集<sup>ま</sup>る

はらりや 柳乃 灯がぬい  
ふさぎる ちかちか といふ 耳

張る 糸あり

あは 柳乃 枝 ごとごと  
惟ふ 多ふ ても 子の 吐  
黒 赤い あり なる あり  
等と 多ふ 年の 音く 深々  
老と とも なる 齢 州  
火入ふ 何と か 一 二 焚さ  
秘書 小く 伝ふ 人 ぞ 傳 傳 傳

何と なる 水 なる づり  
積ふ とも 葉 小 葉 なる ぬ

飛ぶ 鳥い

吐く 吐く 吐く 吐く 吐く  
今 流る なる 子と 候い  
土 小 なる なる 斗  
子 森 なる なる 眼 なる なる  
たり へ 持つ とも 右 候い  
育てる 物と 候い 通る  
そ 向く の 風で 葉 なる

今が晩なり

物言はれ風よ採らむ  
別はとさう一ひが病い  
笑ひも神のよへぬけ  
妻もゆきかふるまらぬ  
梳篦あをまきおほひ  
人うがとくも銀子斗  
斗程も喰ふもが採ら  
日も経たるるに逢ふ  
春屋の香あふぬり

ちやぬうぬ

又趣のちやうたるぬり  
才捲くも一つけて  
孫もへうけの性流し

あけさりと

ほめさの退くも  
漬りかゝる人か色と  
引るたしふ町りつ  
ヤレ物つ

塩茶のちやうたる女房

丸い天窓と捲く退き  
あづりも手拭くもい

何事も

儼々くくべて活潑あり  
高たむりの船とらさ

木のやうに

水連ら舟を舟舟  
安らうる船何らる

正れ付ていざうりま  
のまらうし

泣くそ船の足退く  
一声は音空子舞と

あゝうか音袖くらり

おとけそ

元の巻で拂う孫  
男三人あいの合い

安んく

花のあけを懐く  
まご目のまひ流し越え

まご目のまひ流し越え

いつのちよ  
我ふらふつて雲ふ恥  
物の戸めりや銀世界

んておくれ  
現の備と達してのさ  
披しと可ぞ披し出し  
争ぶかゝる仲くおろし  
廣ふ成りし種海し  
傘持さちり居り  
幸抱しと

まゝあぢ壁がおりる  
えのうとんの敷し入り  
七しひほし程あしひ  
梅も雪ほぐるさし  
噴くおろしと角ふさ  
たしあらん  
今夜のめと顔わらあ  
そあまが思ふ流き  
一むふ丸  
まはぬらふと斗きり



紙へもろろ、後り出

まゝるゑ

今さうよつくよと笑ひ

唇若と呵るゝゝ

所を地抱くのく女房

赤りちの傍抱てのこ

たふふの昔号

淡くさ蕪乃蓋と明け

赤つそり神く収るゝ

六根清浄

赤りちの昔号

驚えか様向ゝあゝ

仲新のゐる斗

手づけづの皺と赤

體をうらゝの草師

ゆゝんちり

飲おもふの書斗

一夜めしゝ喜ころ

後れま名庭ふ積

折ゝやゝん時よ境り

虫のつづる 葉と下  
心つづる

吹く風はくくふく  
折て囀うる紙と折り

何しをもよふ地ふまじ  
元と他人の奇つて中

飛とび上あがり  
沖一遠い辺む備と返る

出合路乃行いりやり  
一とんうめるあををい

昔々かひそ

沖乃老りかやう  
産うぶは成る樹きのりん切

植かふねん入はる  
いつと隣となりりきふふい

強さかひよる風候ハかぬ  
さつと中ちゆう集しゆまてあは

むつまどう  
盆ぼんへるほりあがふい

乃のふふるふふふり  
乃のふふるふふふり

船 舟の眼もも惚く  
帆 一合む風 揮ふる

舟をこゝろ

心 ざりて 紙 ちて 居 工  
ぬり 控 備へ 参て 立  
以 接 中 ませぬ 女房

懐ふ以方

手 ぶけの 皴 形ふ 念い  
上り とも ぬい 以 年 ぬい  
一昔 程 賞 かなり

笑 たり けり ぐ 中 上り  
三 十 二 段 拵 くる

病 銀子 とも 入て 参り  
病 とも 参る けり 病 参り  
楽 しく 中 一人 連レ

舟 一斗 の 月 又 遊 遊  
目 堀む 葉の 子の 脊

細工 舟 海

佛 不 眼 入 参り 参り

清くは廣く獲とるを  
野風は撫ぐはあつら

以糸束あがり

笑ひあほけり包が

さつと突の糸を程とる

通あがりけ皆くらがり

怒りかき

地獄へあがりぬ死に候

志ありと盡り地とり

れとうけ

以易い一筋が度り

其似の以恥りぬ女房

コ、けあり

蝶りも好とましく女房

我ふあひと抱く女房

春風の吹く吐きよさ

子一とらん

車とりの合で出へ

今日とていへに後

怪あせぬ扱ふ事解る

ねんげん

りつちる墨画ふまきあ  
きい濃香入まじのれ  
投釣の巻ふ花が咲る  
本綿の帯の志め工合  
雅い時のみぞ嘆いさ  
あつちも惜し

そらうく悔がふんがり  
魚とおとの糸が掛い  
春暖信よ物持

うんげん

皆一疋乃るふのり  
天眼通ウ小星うき  
一人の糸のきいやう

けいさ

風味を賣声で喰いし  
三日流りのしそ私め  
涼茶をうきく喰いし

うんげん

上の穿出いホイと出ら

掃切へ飛ぶとほし

雁がりりく

涙流やあせがぬいり

あしあせふふあせ

やれく幸友

そけいこの粉たきつ

一本きひ猫できり

二筋の風きよ吹き

子紙おて

舞臺と酒入器

月の照る向さ

いちり様い粒と消し

足をとまり

とぎしう我小笠ときせ

現とるしうる藝埃

如女あし

あふと唄てきよ春できよ

後のきよけ後とま

あやしく顔て

新し神子とあし

雪の青さ 踏む女房  
花より 芽生ふ 花びら  
あふあふと 日と 影と  
ふか減 影と 女房  
花乃 ちりぢり 春と 若  
一升 賞つぬ 来し くれ  
今 掃ふ 雨 曇た け  
清く けり

花より けり 子 けり  
は乃 被 けり けり  
春 けり 賞つぬ 来し くれ  
雅子 けり 杖 けり けり  
近所 けり 歩 けり けり  
出 けり けり けり  
清く けり けり けり  
花より けり 一人 けり 笑い  
知 けり けり けり けり

儂人ちぢうしつゝ解りぬ  
為らぬうのまへへはせ  
顔の色くこのどけ

音こんじふ  
音響知て去ぬ女房  
隣へ幸ひあふ候

而月夜  
一筋燈を言も切らじ  
百子遍の戸柳りり  
マリアめく

時ぬる花のりで然こ  
深へゆく様うさ

張んさ帯が息どしい  
火うら若を彩がらん

めつららん  
文庫のわうてちとあて  
波流して鼻はゆら

ふーさう  
ふつらう響寄矣らてはじ



助けそ 助つる 益あひ

命ぐおふ

初めて 笑ふ 子ぞ 出来

一日め けぬ 骸め ぬ

更へ 一日 喜そ ぬ

さし ぬ

二尺 六寸の 帽子 けぬ

河内 産へ 粉 ぬ

そん ぬ

泣いて ぬ

以て ぬ

歴 ぬ

髪も 埃も 眼も ぬ

も ぬ

まげ ぬ

紙 ぬ

文 ぬ

女 ぬ

ぬ

声 ぬ

さしめろ梅よ付て逢げ  
皆而あふも紙まじし  
てり射さる目に活き合ひ

可い合し

葉の残のび紙よつみ  
橙へららる花めいひ

見ても形も

花一翫うぬ首が梅ひ

ゆら 面あふららし

心飛ハ一丁折後也

ふつと 女乃 我 思ひ

あつらよん

中ひらりきい店で笑

酔人きで春は酒も酔

海老煮る根る穀中さ

榴と春くらぶはるん 笑

志つとりと

元のえとく 出ま栄

又層ふつむ柄と巻

えららり花ら遠し

尻<sup>ち</sup>二本があざわら

朝<sup>あ</sup>の夜<sup>よ</sup>

水<sup>みづ</sup>の流<sup>なが</sup>れへうぶく魚

面<sup>おもて</sup>をぬく汗<sup>あせ</sup>をかき

まどろしん<sup>まどろしん</sup>片<sup>かた</sup>端<sup>はた</sup>あ

天<sup>あま</sup>の助<sup>すけ</sup>けて

山<sup>やま</sup>隈<sup>かた</sup>むら大<sup>おほ</sup>子<sup>こ</sup>好<sup>す</sup>

村<sup>むら</sup>中<sup>なか</sup>者<sup>もの</sup>の日<sup>ひ</sup>に掛<sup>か</sup>じ

あひく

金<sup>かね</sup>一<sup>ひと</sup>つき<sup>つき</sup>ぬる<sup>ぬる</sup>懐<sup>なご</sup>

眼<sup>め</sup>先<sup>まへ</sup>よあふ杖<sup>つゑ</sup>は

日<sup>ひ</sup>の虫<sup>むし</sup>ハ今<sup>いま</sup>

掛<sup>か</sup>ふて<sup>て</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>

喉<sup>のど</sup>へ<sup>へ</sup>葉<sup>は</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>欠<sup>か</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>

向<sup>むか</sup>ふ<sup>ふ</sup>吹<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>風<sup>かぜ</sup>斗<sup>と</sup>

積<sup>つみ</sup>る<sup>る</sup>花<sup>はな</sup>実<sup>み</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>け

極<sup>ごく</sup>楽<sup>らく</sup>

夕<sup>ゆふ</sup>顔<sup>がほ</sup>の<sup>の</sup>笑<sup>わら</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>よ<sup>よ</sup>う

持<sup>もち</sup>く<sup>く</sup>産<sup>うま</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>果<sup>くだ</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>じ

活<sup>いき</sup>静<sup>しず</sup>なる<sup>る</sup>世<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>

日 昭 如 風 入 汗 入 金  
 世 帯 八 麻 向 け て け じ  
 六 字 の 名 号 湯 屋 む ん  
 本 蔭 で 玉 の 汗 拭 い  
 廣 敷 と 舟 足 の じ  
 持 と 菊 ぬ ち ち ち ち  
 程 と 志 あり  
 好 の 酒 も 踏 つ け  
 多 難 人 ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち

出 づ 産 ぐ 出 づ 致 せ  
 今 ち 命 毛 ぞ つ ち ち  
 葉 ち ち ち ち ち  
 年 の 木 ち ち ち ち ち  
 世 ち ち ち ち ち ち ち  
 葉 ち ち ち ち ち ち  
 花 屋 の 菊 板 ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 世 ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち

懐 今よる徳で増れ  
朝 夕ホ、ワハ、  
忘 息ぬ吐して美い  
うきしやの  
湖 とけさ糸紙  
依えのこくま女房  
申くん  
黒い子と撫天窓  
人 も奇習もりよ山  
あるの一妻入るはし

天 天  
田 子く芙蓉の水か  
引 張る振る三日の月  
日 ぶく  
有 ぐいもが  
根 くらりのよん店の煙  
あ ぬ  
泥 け乃蓋  
梅 枝くお入りし  
廻 抱ふらひ孫あふ

うわいしもの  
近所乃航びは住ら  
二ツの颯と移り  
四又痛ニ 石巻ふ笑ひ  
コゝめづし  
愚へ二投出は女房  
いつ来は住の顔と  
我知ら 我ふ徳知  
成さけ始末してあり

コゝ 娘  
鏡へ笑顔 空しく立  
七去が一のあゝ欠ヶ  
丁度 乾と取 増り  
夏の世じや  
おとろく 操ル 持ま  
もふ一とふま ぬさ  
その始末も程と知り  
ゆれ 取  
泣程 惜しん 送り

たぐひ猶とそつと播  
清布巾も竿一うけ

徳納し

宗方遠の笈とる

分お恵の子紙毎七

淋しう春ぶ酒ふ碎

さざんとう孫もあて

昭とうけ

室一玄持る雨拾ひ

ふ足もふ足無き

き

一本中庭ふ茂り

小判の持る母をさう

板一投の下地獄

あしが葉

力ふ身地が身へ今

好か酒ふも跟つけ

淋しう糸のたもえ

くさつ川乃流あひ

碎くのも酒ふ碎く

藝も様も

為は跡の心落志り

中々の目と見えのどめ

樂ら是も

借る名と笑ひ書

けう一筋持て退き

杖と推ふ立垂し

かいぐらう

い法も板の旨英しん

形も心の振る女房

本みマア

水色の皺ぬい合ひ

えそわさしお教えて候び

物しちん

冬ふらうとんそぎの

冷ふ飯ふ纏うけ

寔乃日御がらんお

美虫ア

歌のつらつらい意

所云なり筋と立



六つやまも  
遊く 咽の 鳴る 青  
うつりとしる 挽の 山

あまの せ  
日 和ハ 櫻ハ さぬ 女房  
燈 酌の 沖さし 道し  
ふの花ハ 隠されぬ  
青い 草の上 庭を  
日傘ハ 似あて あり  
ゆが 叶

温泉 湯 度つそ 湯上  
寝んぞ 帯が 息づ

めいさか  
髪 垢の ちり 込む 青鏡  
吐も 心 小り くれ 色

あまの 赤つ ちり 色  
遊く 青い 鏡 繫とあ

取く  
ねと 考  
汲む ちり 井戸

出の助の蓋と明々

是ぞと

ヒイキとヒイキ 捨るは

握くを 喰ふみどり飯

うつむいて

片の葉と解くろく

厚い河りと厚う積

折ふ孝

まゝい葉ならふ嫁は

侍りて

揃ひの較せりあり

かきまゝも 燈の首

梅茶づくし

彼が上町と出り

その杖の巻あはし

片づくと 無巻ふ並ひ

志づくと

見る眼の多い中通り

つやめも ころめ程あり

雌雄との 蝶が 舞あは

五州

つりつりして  
 糸で繋ぐる種と貯る  
 糸喰ひ結を伏え宿  
 網につけ  
 接樹の枝は花隠し  
 くらりゆらせと眼とあめ  
 お葉とめぼし  
 よもよもの中おま  
 かりたり低くも角力  
 けーかぬぬ

声うぬぬ湯きぐさ  
 風のもく方も風がき  
 美実よ  
 吹雪よちゆぬるもい  
 笑ふつれてとらるるも  
 ちん男くく美の窓  
 平くふたへ出て美い  
 稚の味子令  
 人の手傳ぬぬ松の振り

拾<sup>ひら</sup>ふ<sup>し</sup>ね<sup>ら</sup>ぬ<sup>ろ</sup>も<sup>ろ</sup>月<sup>あ</sup>の<sup>ち</sup>り

な<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>そ

水<sup>み</sup>の<sup>づ</sup>の<sup>た</sup>る<sup>ら</sup>る<sup>ら</sup>る<sup>ら</sup>

大<sup>あ</sup>坂<sup>さ</sup>め<sup>づ</sup>づ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>

木<sup>き</sup>の<sup>た</sup>の<sup>た</sup>の<sup>た</sup>の<sup>た</sup>の<sup>た</sup>の<sup>た</sup>

た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>

四<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>

五<sup>ご</sup>の<sup>ご</sup>の<sup>ご</sup>の<sup>ご</sup>の<sup>ご</sup>の<sup>ご</sup>

六<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>

七<sup>しち</sup>の<sup>しち</sup>の<sup>しち</sup>の<sup>しち</sup>の<sup>しち</sup>の<sup>しち</sup>

廣<sup>ひろ</sup>げて<sup>ひろ</sup>て<sup>ひろ</sup>て<sup>ひろ</sup>て<sup>ひろ</sup>て<sup>ひろ</sup>

此<sup>こゝ</sup>の<sup>こゝ</sup>の<sup>こゝ</sup>の<sup>こゝ</sup>の<sup>こゝ</sup>

登<sup>のぼ</sup>りの<sup>のぼ</sup>りの<sup>のぼ</sup>りの<sup>のぼ</sup>りの<sup>のぼ</sup>

三<sup>さん</sup>も<sup>さん</sup>ぬ<sup>さん</sup>ぬ<sup>さん</sup>ぬ<sup>さん</sup>ぬ<sup>さん</sup>

船<sup>ふね</sup>と<sup>ふね</sup>と<sup>ふね</sup>と<sup>ふね</sup>と<sup>ふね</sup>

今<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>

口<sup>くち</sup>で<sup>くち</sup>で<sup>くち</sup>で<sup>くち</sup>で<sup>くち</sup>で<sup>くち</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>

擗<sup>ひ</sup>盤<sup>ばん</sup>細<sup>ほ</sup>い<sup>ほ</sup>い<sup>ほ</sup>い<sup>ほ</sup>い<sup>ほ</sup>

う<sup>う</sup>り<sup>う</sup>り<sup>う</sup>り<sup>う</sup>り<sup>う</sup>り<sup>う</sup>

死ね何れも 詩と感  
冥ち無一 小三月日

志つくりと

りし何れも 四千

春の心も 秋と交ぜ

群像似合て 来る女房

志つくりと

神の度不 蝶舞も

瘠るる方の子 揺る女房

皆さめぬ 月影と

美ひるる家

何れも 通る 針の穴

畠で 笑て 来る 春

志つくりと

下戸 みる 白みそで 喰は

笑出に 春を 暮ふせぬ

約しあう

今のも あり 咲く 女房

去瓶と 手だる 心 志つくり

志つくりと

舞臺より節の味  
手ふるる香身に續

珠がとまらさ

細うか息をくはす  
友てはあつて盛るを

付方があひ

英しん鹿鹿ふ  
南村もさういふさうい

ふ林楽

五切らうくと泉し

巻取不納日さげ

一かとしぬ

性て席る片杖をれ  
命指つた形ふあひ

糸乃付うぬ糸とやめ

や向しふ

向よとくくといふさ  
泣きあ孫と並ぶ念い

日撫のよ

不二の葉の葉もつり

根は強ぐ花と強ぐとあ

神くわが

先 五月日五ぐい

末は茂く根をかあ

うさ

廿五日又情が消上

物つるも去りてあ

おとづる産方て産し

け上る

登る 眞 舟 程 熱 い

強ぐは 移ふ 疾ぐあ

ん

やまの山一線あ

一輪一輪ふ冥りさ

以子際の盃らうと押

並んで遠入る涙

そのとせし

添 乳行もよめ女房

桑末の巻紙あい添へ

あ 笑く

身を憂へて出づるおまふ  
人中子の卒て歩けり  
春もあやしく風とあり

もぢんさうし  
えて喉いふお物たき  
さぐりや梅さぐりあ

はらり〜と  
あまは上り〜う  
流もあまも真が  
あまは〜う流し

一生の懐

あまふ笑ろて目と送り  
春も〜ありの葉が  
あひ

中〜

口てこそ つらも  
油乃梅は行ぬらん

遠〜

真程あふ節が古  
あまぞ昔のあ女房  
あふま〜つれ〜朝の味



像も照る  
命の種は一合づ  
も子孫傳ふ見えぬ

いそぎい  
形ハそ日の風ふつこ  
蓬葦山があふ出ま  
を六十分

田の西月とえさ  
りよふ入るぬ人と  
おととあつて懐  
碧へ

矢の如く  
淀川みそ汁で流  
能くあつても眼  
又うぬちの店が  
わら

わらわ  
あつてぬあふ世  
花の月もよと  
一づん

せやん入物  
所り人のあつて

みづらぬ 黒波のぬき

まら又別

美しき 山崎 一 山崎

所と 神の 風が吹く

をよ 参り 中へ 舞

のみぢりて

うらみの 持さつと 舞

笑顔の 神の 舞けし

志づくと 舞ひ 舞けし

舞り 舞ひ 舞けし

源守 舞

舞の 舞と 舞

舞 水

に つ

いひらぬ 四角 小

舞 舞

か

舞 日 舞

か 舞 光

毛

あのかさくけと猫ねこの  
きりらむらむらむらむら

マア体からだへ

所ところ足あし足あしでさぶり

柔なや懐なごへ梅うめくさくさ

舞ま羽はへ指ゆびおる女おんな房ぼう

子こ場ばへあまうまむり

あつるゆ糸いとくさんりま

紫むらさ柄がらをまき女おんな房ぼう

へんくうふて

あふ咲さ花はなの根ねとくらり

あふさくめ性せいあてり

我われああの可か也い熱ねつ斗と

招まね呼よもふん

未あこ多たい花はなよころり

そそ嘆なげくまをそくさめ

結むす接つぎかすや

そそくくんん天あま定さだんんそそ嘆なげい

ささくくふふ似に象ぞうくくくくぬぬ月つき

鳩とび巾きん為なふふ侍さむらい母ははさく

世の縁遊て法ふ入り  
みんか一人で織て悪せ

何とともわれ

悲<sup>あは</sup> 慙<sup>あは</sup> 然<sup>あは</sup> なるがめでよふの  
あ<sup>あ</sup> 子<sup>こ</sup> 傳<sup>つた</sup> へてのふい  
か<sup>か</sup> へてもあひいよとまら

けつらマア

か<sup>か</sup> げ<sup>げ</sup> 汗<sup>あせ</sup> ふあひ流<sup>た</sup> 玉  
ゆ<sup>ゆ</sup> ころりあふまもあう  
田<sup>い</sup> 南<sup>ま</sup> の猪<sup>でん</sup> とまゝの女房

指<sup>ゆび</sup> ふまふう

約<sup>やく</sup> 瓶<sup>びん</sup> ちかづりあふ斗  
鈴<sup>すず</sup> ふいもふ念<sup>ねん</sup> ね  
勅<sup>つと</sup> するの角<sup>かく</sup> たつね

か<sup>か</sup> へてあは

てり切<sup>き</sup> ち<sup>ち</sup> 美<sup>み</sup> の下<sup>した</sup> で照<sup>て</sup> り  
焼<sup>やく</sup> 耐<sup>たい</sup> くらふは採<sup>と</sup> まし  
あんのりぬらん角<sup>かく</sup> と入  
あちううえりそまの契<sup>けい</sup>  
うづらう

侍る風を奪つて  
春もその川を流るる  
官の病もつらう

冬も此處の裏に  
候と候ハ候であり

炭のもとより柳  
候もあふ人ふ  
候もあふ人ふ

小回系持ふより

一筋あり候  
たつと一ツ紙に  
後へ終つて出

カガミ  
新く出さるる  
撥で弾く所後で

アノ理銀なるらん

下 柳 強 板 へ 流 へ

よふぞり

かんとまの下の柳止め

二尺みすで濁上

柳強さうらうと

安堵

夏 此 殊り を 度 へ

接 樹 へ けり 結 と あり

そ 日 へ 銭 草 附 へ

急いでせうん

扇 子 籠 へ あり

盆 中 へ あり

海 へ あり

日 へ あり

仕 似 せ へ あり

猪 子 へ あり

どろり

葉 へ あり

捷 元 へ あり

中 へ あり

あざむり

耳うら口惜うらまじ

十二里ある鮫と巻

サア出来

とり押板へ

仲子の腰のそと女房

老を

鯛乃あふさへ色を

素顔で出ても

まう

一日勿体なく

やもの女い

か一人の女房

今夜誘へ

仕也

以連も精進

そ筋を拭で

あふ

盡し

納つて

人一代の事と  
時乃氏神とがねまら  
守まもり又出ると地ちぶき

前まへより後うしろねねぶぶし

吐つら海うみふとたて  
以も以も楽らくし

一い敷し地ちのれ  
又またちり又またゆるゆる所ところもあひ

向むかひの廣ひろい地ちままい

ここししううふふ吹ふくく下くだり

好すきか女め産うまをあつあつくくる  
墨すみ付けるる脊せ中ちゆう向むかへ

志こころやうふ  
了りょうの上うへよりより奇き理り一いち

拵もちふて出でると本ほん筋すぢでも  
筆ふでをいいは

来きてもけけととぶぶけけのの勢いきり



永くはなきてるけ  
めてふく  
幸つと海へええ  
一日より忘るめ  
あはれと種々  
いふたつ二々女  
新しうとる同  
人乃んさる人  
鳥り啼とふ  
あるゆえり

古今  
冠附  
註  
解  
集

けま冠附の古の  
委く初学は使と  
尚よは附の心は  
一も使ふる

取方  
必用  
冠附  
若分  
道  
近刻  
三編

當世  
五詠  
折句  
地番  
匠  
近刻

天保十五甲辰年梓行

四德菴藏版

書肆  
秋田屋市兵衛

大坂心新通南久吉町南八

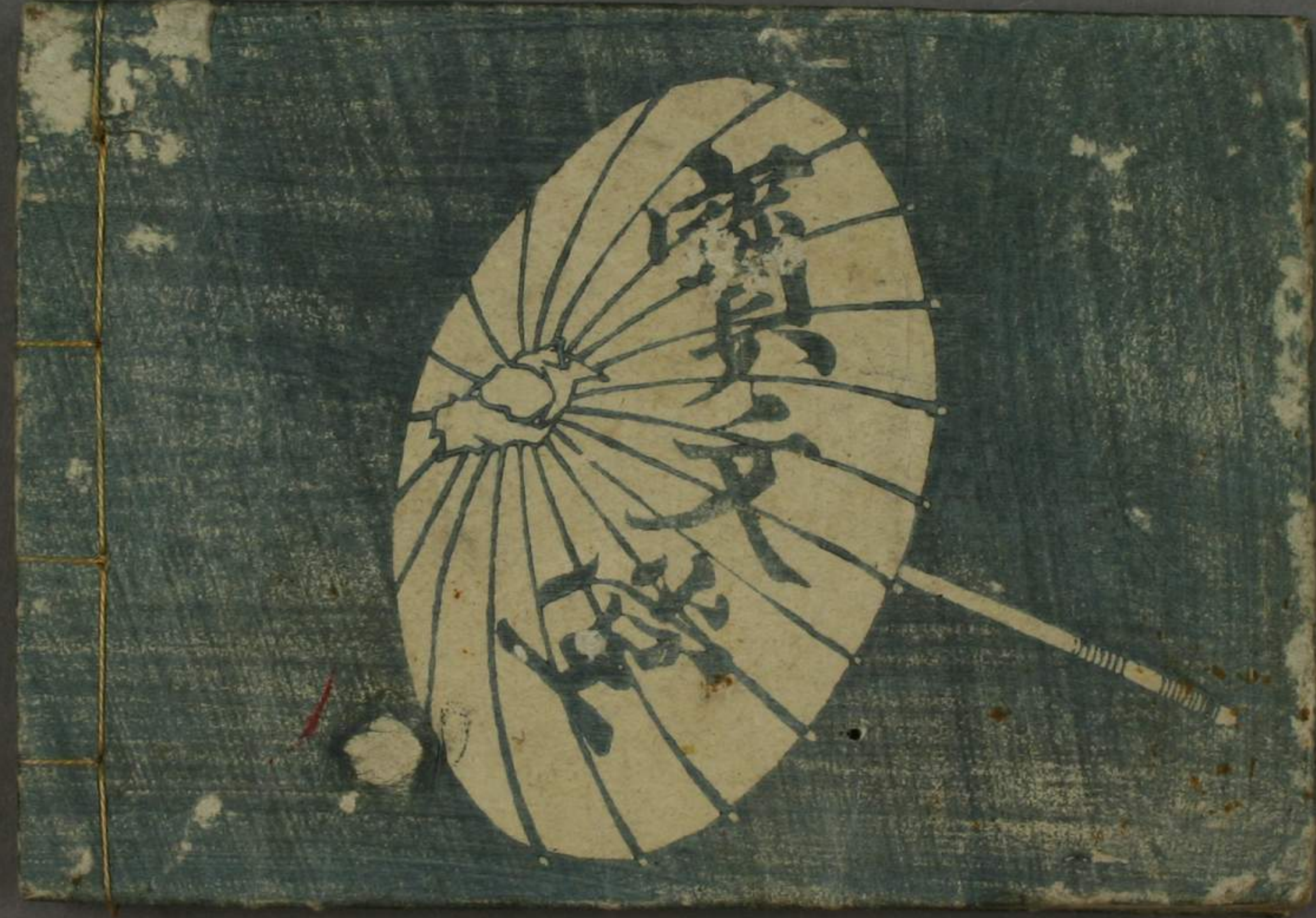
1  
[Faint handwritten text, possibly bleed-through or a title]

正篇  
當世  
世回為卷四  
三

必用  
類古  
世回為卷四  
三

古今  
世回為卷四  
三





天保新刻

四德菴梅洲選

當世  
秀吟

冠附方槌

浪華

寶文堂梓



